

虚の符

洪水企画 2015.6.10

12

イカダ

http://www.kozui.net

白く鮮やかに

小島きみ子

ふりそそぐ夏の光の屋を過ぎて、
急な夕立のあとに母は過ぎました、
白薔薇が咲く夢のなかで、
腫れた臉の裏を濡らして、
おそろしい、
くろい波が押し寄せて、
「タスケテ」と、
母のDNAは叫んだ。

（天国には愛があらう。
地獄には力があがる。）

薔薇の、
臉を閉じて、
再び、
白く鮮やかな、
薔薇の音がした、
（地獄には力があがる。
天国には愛があらう。）
母は言うど、もう何も言わなかった。
「あかるくて、眠れないの」と、
母は言うど、もう何も言わなかった。

*註「天国には愛があらう。地獄には力があがる。」は、山頭火の言葉。

テルアピブで朝食を

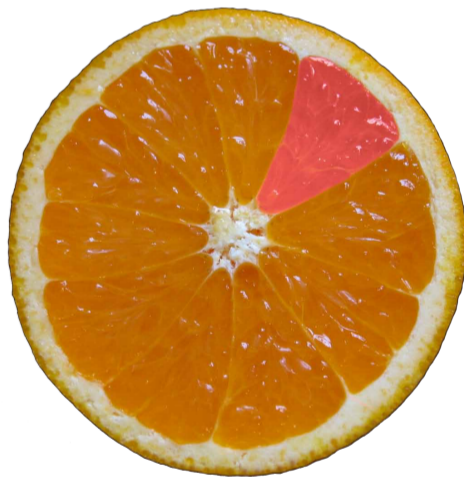
森山 恵

ユニオンジャックの縫い取り
迷彩服の袖
がわたしの眼差しを射る

（なぜここにイギリス兵？）
日焼けした太い腕が、手榴弾のようにオレンジを投げあげて
紛争の話などしない
テルアピブの太陽を手のひらに受け止める
しぼりたての
朝
のテーブル
青年の髪の色も笑顔もオレンジ色に私の心を
とらえる
どこまでも、みどりを繋らせ果実を実らせようと
天井高いホテル
の室内にも伸びひろがる オレンジの木々
明るい果実
たわなに実らせ
石床に満ちる 真夏のくだもの
だれの

最後に辿りついたはず
の土地
荒れ果てた、さまよえるユダヤ人のパレスチナ人たちの
だれの
土
荒地をみどりに生まれ変わらせる想い
だれのため だれのもの
だれ
のくだもの真夏のくだもの
だれの なにゆえの
戦い
（開かれたガザ地区 ヨルダン川水源
果てしない争い

わたしはオレンジを二つに切つて彼に差し出す
さまよえるわたし わたしのくだもの
切り口から果汁があふれだし
手首の傷を濡らし
地へとしたり落ちていく



（ただ同然の寒気に蠶引きされた黄色は……）

たなかあきみつ

ただ同然の寒気に蠶引きされた黄色は
見たところ *allegro moderato* の発色だ、夕暮れ時ともなれば
口伝のフィルム型マグネットが鈍くなり手書きのフリーボートが
混色のみならず冷蔵庫の扉を床めがけてしだいにずれ落ちていく
焼き菓子の8の字の穴に無限を
青空の《青》を見出す、耳を聳するばかりの青い泥を浚渫する
この二つの結び目は出港間際の艀、その名も《死の島》号であり
オニヤンマの今はじき複眼を思わせる、長身のラフマニッフという
集音バケツの柄を、血の色からいつの間にか8の字と結び目は
紫紺のグラデーションに密封された、ヨコ位置のウロボロス
蛇無限の臭気圏に留め置かれたのは、鮮紅色の殺傷能力を怖れたか
それとも死なるものに事後いちだんと密接に寄り添いたかったのか
これは単なる色彩の変更というよりは人混みの浜辺の漂着物を
生と死の分水嶺を描くことに主眼があるキサンティンよ
視覚的に隕石と流星は死の乾燥軌道を競っているようで
本来はまともに視えないもののわだちを思い知る

人混みをぬつぐねぐねグツンヌ、アンドロイド柄のように長年
放置されてきた枕木の折り重なるがらくた、小骨のような筵の数々
眼裏でさびるにまかせた海老反り鉄道の尖端を幻視する
そこに群れ集う黒褐色その他もろもろの《*perpetuum mobile*》
いや増す寒気にバーマントイエロウは映える
磁気的の回復には耳朶のせもどきの造形が不可欠だ
半ドアのまま眠りこけた黒色を揺り起こせ酔いどれschmupsを
がぜん短絡睡夢の *Oganango* やあ *Oganango* の回旋する番だ

砂時計の有視界の繩が瞬時に絢う飛行機雲、線条の屠場よ
タイルの壁面に投影されびちゃびちゃや発熱する染みよ
コンクリート床の木箱には繩の群れ、もちろん絡まり合つて後
首から先はぐねつと行方不明！ なんとも《厩大な空無》！
徹底的に禁煙の屠場での吸いさしの煙草の紫煙の低空飛行、さえも
サラトフの詩人ならこう呟くだらうに、全レトロを律する例の
《神は口脛脛脛とタイや装着の間にこそ介在する》と

自前の insulation として全ステンレスの銀色の鍋の
正面の曲面に映り込んだ2個のトマトとF6の画用紙を設定する
桃尻ならぬ安菜を呈する本物の単純トマト尻は静謐な火焰と化し
ど真ん中のF6紙はといえば縦割りの食虫植物のくびれを曝す
完全したトマト特有の赤色は縮れかけのアマリリスの花弁よりも
この曲面ではタテ位置の暗赤の穂先、暗いバーナーの火焰樹となり
一方の対向するF6の画用紙の平面は目下《カオスのマグマ》にて
πの字を逆さにぐんぐん巻き込む銀色の舌になる



無限 米山浩平

（何ひとつ書く事はない
私の肉体は陽にさらされている
私の妻は美しい
私の子供たちは健康だ 谷川俊太郎『鳥羽』）
いまこそ金の産出量が提示される

（本当の事を云おうか）
植木鉢の花に水を与える
この振る舞いがどれだけ危険を伴うのかを
詩作者は知らずし時に過す
（何ひとつ書く事はない）と連観していたようだが
あわい彩りの花弁は既に政治化を遂げている
隣室から響いてくるピアノの和音は
あまりに生臭く差別的だ
逃避できる日常茶飯など いつまで残されているのか

（この白昼の静寂のほかに
君に告げたい事はない
たとえ君がその国で血を流していようと
ああこの不変の眩しさ！）
まぬけで気楽な状況を離れて
わたしたちのなすべき役割が明らかになった
それは金の産出量を思い浮かべることだ

（始まり）と（終わり） ふたつは
（何ひとつ書く事はない）
詩作者の常套句に貶められたのかもしれない
とはいえ、始まりが姿を現わすとしたら
《金の産出量をはかる》
作業から起ころうる

（本当の事を云おうか）
いま望まれる
最も美しくゴエジーにあふれた選択
《金の産出量をはかる》
さあ始まった
ここへ詩神が降りてくる
髭つらの天使は微笑む
競泳用プール三杯分をしぐ幸福
（二十億光年）の運帯
（ああこの不変の眩しさ！）
誰も知ろうとしなかった地上の楽園
ほんとうの無限に
わたしたちは立ちあうだらう

踊るアホウ

二条千河

踊らにや損、損 と急き立てられて
仮初めのやぐらの上
下手な太鼓のリズムに合わせ
踊らされているんだ 今夜も
右手を伸ばして、右の足
左手伸ばして、左足

暗がりの中から 見るアホウたちが
調子はずれの手拍子を打つては
踊るアホウを指差し笑う
どうせやぐらの上では
太鼓の音しか聞こえやしないが
左手伸ばして、左足
右手を伸ばして、右の足

あんなにも嫌った無様な振り付けも
すっかり習い性になって
今は恥とも思わない
それはそうだ 隣のアホウも
誰も彼もみな 一様に無様なら
粋がるほうこそ恥ずかしい
右手を伸ばして、左手伸ばして、
足が止まった
見るアホウたちが笑いやめる
しかし太鼓は怒鳴り続けている、
踊れ！ 踊れ！ 踊れ！

そうそう踊らにや損、損と
左足には、左の手
右の足には、右の手と
うっかり遅れたふりをして
今は踊らされておけ
おぼろげな祭り提灯の下
そうして指差し笑われながら
一拍、二拍とずらしていつて
いつか別のリズムを生み出せばいい
そのときこそ
太鼓も手拍子も置き去りに
自分の踊りを踊ろうじやないか

笛 平井達也

初夏の連休を使って名古屋に帰省していた。実家のある
天白はあちこちに竹藪が見られるようなところだ。手入
れされていない竹藪では笛も採れないと八十代の母が言
う。母の生家は農家で子どものころ竹掘りは遊びであつ
たと言う。文法という藪もあるが手入れを怠つてもこち
らからは詩が生える。

母などもう節さえ成していない。成竹とも笛ともつかない
いまま私は何か書いている。文法に従っている。書くこ
とに飽きると散歩に出かける。竹藪を見て親竹と笛を地
下で結ぶ根を思う。根茎は振れているが振れたものは
まっすぐなものより強い。それでも根は切れるべきとき
を測るのかどうかいずれば朽ちる。

竹で思い出す。私はしばらく都山流に入門し尺八を習つ
ていたことがあった。階名はロツレチハの五音で記され
る。邦楽の旋法に則つて竹の管に息を吹き込み奏でた。
尺八の節は弦楽器のフレットを想像させるがもちろんフ
レットのような役割を担ってはいない。成竹の節の数は
根茎の時点で決定されるそうだ。

そうやって竹は世代交代を繰り返しても竹のままで。詩
が文法を無視し切ることが困難なように。竹はいつ幸せ
なのだろうか。旋法に忠実な奏者に手がけられたときだ
らうか。文法から自由な詩人にペントとして握られるとき
だろうか。

étude 四肆舞 13/40

池田 康

《13》
一千兆円の身代金が要求された
誰がさらわれたのか
黒電話の奥から
助けて！ 叫びが聞こえる

あれは俺の声だ 誰もが思う
あれは私の声だ 世界中の人が思う
時代という犯人は
白昼堂々大通りを歩いている
だんだん薄れていき

捜査は進展しない
どこにどうやって囚われているのか
助けて！ 毎日のように聞こえていた声は
だんだん薄れていき
一千兆円をもつて犯人はやがてどこかに消える
さらわれた者も犯人と一緒に逃げ
あとには事件の影だけが残り
それもやがて紋様となる

《40》
満帆
しかし船は動かない
さざなみ一つない
無風

寝すぎてなお眠たいときにはさらに眠ればいい
夜の魔法は巨大な円となって広が
真昼に及ぶ
時はいま 風ぎ
風と船と海は
ゆるやかな友情で結ばれる
友情は眠りにについても
共謀する

風も雲もない午後二時
満帆の耳は聴く
宇宙という一陣の風
光と闇の間を抜けていく音を

雷雷雷雷雷雷雷雷雷雷